

宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第11回

第4章 宮川ひろ

その2 『春駒のうた』、『先生のつうしんぼ』、そして、『夜のかげぼうし』
(前半)

これまでの三つの章では、坪田譲治先生、前川康男先生、今西祐行先生、あまみきみこさんのことを書いた。この先生がたと母宮川ひろのかかわりを軸に書いたから、もう、すでに、母のデビュー作『るすばん先生』(ポプラ社 1969年)のころまでを述べている。

第4章では、宮川ひろ(1923~2018年)のデビュー以降のさまざまを作品に即して振り返る。母もまた、私の出会った児童文学者にほかならなかった。

「誉れの子」

2024年6月12日、『朝日新聞』の朝刊をひらくと、「オピニオン&フォーラム」のページで「戦争プロパガンダと子ども」というテーマがとりあげられていた。インタビューにこたえたのは、斉藤利彦さんと山中恒さんだ。インタビュアー(桜井泉)のリード文には、こうある。――「国家のあらゆる力を動員した近代の総力戦は、子どもたちをもいや応なしに巻き込む。今もガザでウクライナで子どもが戦争の犠牲になっている。教育学者の斉藤利彦さんは、日本の戦時下で子どもを対象としたプロパガンダを研究する。」

インタビューのなかで、斎藤さんは、父や兄を戦争で亡くした子どもにふれる。

「天皇の戦争のために死ぬことは名誉であり、遺族の家は『誉れの家』と呼ばれました。地元の人や家は家の前で敬礼し、青年団が田植えを手伝いました。戦死者は英霊として靖国神社にまつられ、その家の『誉れの子』は『父に会いたくば靖国に』という言葉が胸に刻みました」(注1)

宮川ひろの代表作『春駒のうた』(偕成社 1971年、北島新平絵)の文三おじいは、「誉れの子」だった。

前回のおしまいに引いた『春駒のうた』の書き出しにつづく場面。家にたどり着いた圭治は、運転手の平^{へい}さんに抱きかかえられてタクシーから降り、おじい(祖父)が松葉づえを渡してくれる。そのようすを遠目に見ていた村の子どもたちが、車から降りたのが圭治とはわからずに、心ない、からかいのことばを投げる。この子どもたちのことばが、おじいの怒りに火をつけた。

前の年、圭治が小児マヒを発病した日、学校ですもうをとったという。圭治は、すもうがだれよりも強いのに、その日は、負けてばかりだった。もう、ぐあいが悪かったのだ。圭治がめずらしく投げとばされるので、みんながさわぎたて、手足をひっぱったりもしたのである。おじいは、これが圭治の病気を重くしたと考える。

病院から帰宅した圭治が「あそび仲間にも、(中略) からかわれて、これからさき、どれほどかなしい思いをしなければならないことか——」とふびんに思ったおじいは、酒を呑んでは学校にどなりこむ。1年前、だれとだれが孫の手足をひっぱったのか、それを調べろというのだ。

おじいがいくらどなりこんでも、小林先生は、調べようとはせず、6年間つとめた分校を出て行く。小林先生のあと、女の先生がふたり赴任したけれども、新しい先生がやってくるたびに、おじいが怒って押しかけるものだから、長くはつとまらなかつた。つぎの年の春、県庁のある町の学校から、分校を希望してやってきたのが、大学を出て2年めの園田恵子先生だった。そして、園田先生が、はじめて、おじいのいうことに本気でむきあうことになる。おじいは、先生がトットツとついで焼酎を呑みながら、とうとう語り出す。それは、まだ終わって10年にならない戦争のことだった。

「命のあるものを、かたっぱしからころしてしまつて、戦争に負けたら、みんな犬死にだつて、ぬかしくさつて……。負けたつて勝つたつて、死んだことにかわりはあるめえ、そうだべえ。」

「名誉だ名誉だと、寄つてたかつてさわぎたてておきながら、負けちまつたら、鼻もひっかけねえつていうのかい。これでも日露のいくさじゃあ、たつた一軒だけの名誉のいえだでなあ。」

『春駒のうた』は戦争児童文学である

園田先生が圭治のおばあ(祖母)から聞いたところでは、おじいが6歳のとき、日露戦争で父親が戦死したという。おばあは、こういう。

「こないだの戦争では、軒なみの戦死だったが、日露の戦いでは、部落でおとっさまがひとりだつたげな。やれほまれの家だの、勇士の家だのつて、彼岸には部落じゅうでおまいりする。お盆には、学校の子どもが、墓地のそうじをしてくれるで大さわぎをされたもんだつた。

それだから、『勇士の息子は、泣いてもほしがつてもならねえ。』つて、みんながまんさせられる。部落に祝いごとがあれば、祭りでも、建て前でも、道ができて、ひっぱだされて、先頭に立たされた。それが名誉ちゅうもんだつたたんべ。泣くことも知らずにそだつたじいさまは、たつたひとりのせがれが死んでさえ、泣かなんだつた。おらあ泣きましたがつし……」

おばあのことばどおり、おじいとおばあの一人息子の圭作は、先の戦争で戦死した。南方へむかう船もろとも海にしずんだという知らせがとどいたのが、終戦の翌日の8月16日だつた。その1時間後に圭治が生まれた。「圭作が赤ん坊になつてか

えってきた。」——おじいは、そう思って元気を出して生きようと思う。しかし、その大切な孫の圭治が重い病気にかかって、おじいはもう、自分を保てなくなった。連日、学校にどなりこむ「ぐずり」がはじまった。

『春駒のうた』の主人公は圭治だが、文三おじいこそが真の主人公なのかもしれない。『春駒のうた』が、「誉れの子」だった文三が戦時下の自分をどのように抜出すことができるかを描いた物語なら、この作品は、戦争児童文学だといえる。

「美しい先生」

「村役場の玄関から、校長先生とならんで出てきた女の人があった。うすいふじ色のスーツをきたわかい人だった。」——園田恵子先生は、物語にさっそうと登場する。園田先生は、前回、母が読んで読んで読んだと書いた壺井栄の『二十四の瞳』（光文社 1952 年）の大石久子先生を連想させる。

見通しのきかぬ曲がり角の近くで、この道にめずらしい自転車が見えたのだ。自転車はすうっと鳥のように近づいてきたと思うと、洋服をきた女が、みんなのほうへにこっと笑いかけて、

「おはよう！」

と、風のように行きすぎた。どうしたってそれは女先生にちがいがなかった。

（引用は『二十四の瞳』岩波文庫 2018 年による。以下も同じ）

大石先生は、自転車にのってやってくる。岬の分校の子どもたちは、「どうもこれは、いつもの新任先生とはだいぶようすがちがう。少々のいたずらでは、泣きそうもない」と思う。この大石先生に重ねて、母が語る先生の思い出がある。

私が五歳のとき、町から赴任された若い女の先生は、赤いふろしき包みを胸にかかえた美しい先生でした。そのふろしき包みの持ち方のなんとハイカラだったことか。洋服を着て自転車で通ってくる大石先生と、そのまま重なる先生でもありました。

（宮川ひろ『『二十四の瞳』』『月刊子どもの本棚』1978 年 2 月、引用は『あて名のない手紙』メディアパル 2007 年による）

まだ 5 歳だった母は、この「美しい先生」のあとをついて、分校へ行くようになる。やがて、先生が母を教室に招き入れてくれて、母は、正式な 1 年生になるまで 2 年間も「まねっこ 1 年生」としてすごした。——これは、『春駒のうた』の巻末解説に今西祐行先生が書きとめてくださったエピソードである。（注 2）

母は、やがて群馬県立女子師範学校に進学するが、いろいろな行き詰まりを経験して休学する。しばらく村ですごしたが、退学して上京する。蒲田区（当時）の金華学園正教員保母養成所で学び、検定試験で教員免許を取得して、戦中から戦後に

かけて7年ほど教員生活をした。『春駒のうた』の園田先生は、理想化された母の自画像なのかもしれない。

織物としての『春駒のうた』

文三おじいの「ぐずり」が極限に達したのが、夏祭りの日だった。

祭りの日、部落の区長を先頭に、神主、小さなみこしをかついだ4人の村世話人がお宮の拝殿の前にすすみ、そのあとに、村人たちが列をつくる。お宮の入口に新しくはられた、しめなわを区長が切る。敗戦の年まで、祭りのしめなわを切るのは、文三の役目だった。――「それは、名誉ある勇士の息子だからだった。戦死した、文三どんのおとうが、身につけていたという短刀があった。まだ六つにしかなくなっていなかったという文三どんは、おっかあに、手を持ちそえてもらって切った日のことを、ふしぎにも、はっきりとおぼえている。」

「世の中のよいときは――／こまのつのが^お生いそろ／こまのつのが生いそろう」――みこしをかついだ村世話人と村人たちが繰り返すうたう。その行列の前にすわりこんだのが文三おじいだった。おじいは、朝から酒を呑んでいた。――「なんが世の中のよいときだ。名誉あるおらが家の孫をびっこにして、しらばっくれているのは、どこのがきだ！」そんな文三をだれもなだめない。

「ばかやろう。しめなわを切るのは、だれの役だかしらねえのか。」

相手にされないと思うと、おじいはますます大声をはりあげた。

それが、あんまりみじめで、園田先生には、もうがまんがならなかった。

「おじい、立たっしゃい。」

まるで父親をしかる娘のように、先生の表情はかなしげにゆがんだ。

先生に腕をとられると、おじいはすなおに立ちあがって、みこしの列からはなれた。

腕をとったまま、先生はぐいぐいと歩いた。腹がたってたまらないのだ。

いつまでもぐずりつづけている、おじいにも――。そのおじいに、すこしも力をかそうとしない、村人にもだ。

ふたりは、そのまま、細い山道を裏山へのぼる。馬頭観音の碑のある山の中腹からは、村が見渡せる。「――なにが名誉の家ですか。」「あまったれるんじゃありませんよ。」――ひどく興奮した先生は、涙を手の甲でこすりながら、おじいをしかりつける。先生に圧倒されたのか、おじいは、まったくさからわずに、やはり、涙をながしている。

「気をつけ――」

いきなり立ちあがったおじいが、大きな声で、号令をかけたのだ。

先生も、思わず立ちあがって、背すじをのぼした。

号令は山やまにこだまして、もういちどおじいの胸のなかまで、もどってきた。
 「星野文三！ 気をつけ——」
 その声は、祭りでにぎわう森のなかへも、きこえたにちがいない。

母には、子どものころに出会った村の人びとのことを書いた一連のエッセイがある。「祭りや婚礼の酒に酔うと、号令をかけるおじさんがいました。／キヲツケー。おまえは、天下の井上文次郎だぞー。キヲツケー。」——こう書き出されるのは、「号令をかけた人、笑いとぼした人」（『親子読書』1974年11月。引用は『母からゆずられた前かけ』文溪堂1993年による。以下も同じ）だ。号令は、夜の火の見やぐらの下あたりから聞こえてくる。文次郎さんは、2、3年のうちに妻と長男夫婦を肺結核で亡くして、のこされた小さな孫をひとりで育てながら、年齢にはきつい農作業に精を出していた。村の人たちは、「——たまにゃあ酒ぐれえ飲んで、号令の一つもかけなきゃあ、おじいだってたまらなくならあさ——。」といったという。

「星野文三！ 気をつけ——」は、闇をふるわせる井上文次郎の号令からモチーフを得たものだろう。『春駒のうた』は、母のふるさとの村を舞台に、ふるさとのことばで話す人たちを登場させた物語だ。そこに、母のさまざまな経験を織り込んでいった。

物語の「出口」

あるとき、園田先生が子どもたちの絵を手足の不自由な友だちにおくる友情の絵のコンクールに送った。そのなかの圭治の春駒の絵が厚生大臣賞になる。圭治は、絵を描くのが好きで、引きこもって学校に行けない日にも描いていた。春駒は、雪がとけて春がやってくるときに、村にやってくる角付けの人たちだ。「トトトトトトトト。トン。」とたいこの音がして、「春のはじめの春駒なんぞ／夢に見てさえよいとやもうす」とうたう。木で馬の首をかたどったものを手にもっている。

コンクールの表彰式のための圭治とおじいと園田先生の上京が、『春駒のうた』の物語の「出口」をつくることになる。ここには、私自身のことが織り込まれている。私は、幼稚園の年長組のとき、クリスマスイブの朝に、パジャマのズボンに火がついて、両ふくらはぎに大やけどをした（父が素手でもみけしてくれた）。小学校入学が近づく春まで、2か月あまり、私は、家でねていた。小学3年生になって、この体験を書いた作文が、手足の不自由な友だちにおくる作文コンクールで東京都知事賞を受賞した。

表彰式で、園田先生は考える。

おじいがよろこんでくれた。よかった……でも、おじいは、どんなふうによろこんでくれているのだろうか。終戦でなくなってしまった、勇士の家のあの名譽を、いまとりもどしたとでも、思っているのではあるまいか——。

ばかりでかい賞状が気になった。

表彰式のあとには、受賞した子どもたちと付き添いの大人たちも、大型バスで東京見物に出かける。途中で肢体不自由児の学校に立ち寄り、入選した作品をおくる。名所めぐりのコースには、靖国神社もふくまれていた。おじいは、戦死した息子が好きだった、かちぐりを持って村を出た。ところが、「整肢学園」の子どもたちの懸命に生きるすがたを目の当たりにしたおじいは、「これを、ここの子どもしゅうに、たべてもらっておくんなさい。」と、かちぐりを渡す。そして、上野駅でバスを降りて、もう帰ろうというのだ。園田先生は、「だって、靖国神社は、このつぎなんですよ。おまいりだけでも、したほうがいいじゃありませんか。」という。それでも、おじいは、「どこからおがんだって、おなじことだ。なあ圭治、けえるべえや。」というのだ。

長崎源之助先生への手紙

1986（昭和61）年、映画「春駒のうた」（監督・神山征二郎、脚本・神山征二郎 他共同執筆、共同映画配給）が公開された。星野文三を演じたのは田村高廣さんだ。映画が各地で上映されたころに、母がもとめられて書いたエッセイ『春駒のうた』によせて（『児童文芸』1986年11月）には、「わたしは、四十を過ぎてから書くことに出会わせてもらったのですが、書きたいと願っていたのはこの一作だけでした。」（引用は『母からゆずられた前かけ』前掲による）と記している。

のちのインタビュー『春駒のうた』の宮川ひろさん（談）（日本児童文学者協会編『作家が語る わたしの児童文学 15人』につけん2002年所収）では、「この作品を書いてしまうと、もう心の中がからっぽになって、つぎの『四年三組のはた』（偕成社、75年）にたどりつくまで、ブランクがつづきました。」（カッコ内原文）と語っている。

『春駒のうた』は、『るすばん先生』（ポプラ社1969年）、『りんごひろいきょうそう』（小峰書店1970年）、『木のぼり公園』（あかね書房1970年）につづく母の4冊めの本である。そのあと、『四年三組のはた』（偕成社1975年）の前に、『アークも転校生』（小峰書店1972年）、『おかあさんはかごふさん』（ポプラ社1973年）、『先生のけっこん式』（ポプラ社1974年）、『地図のあるてがみ』（ポプラ社1974年）の4冊を刊行しているけれども、たしかに、『四年三組のはた』までは、「心の中がからっぽ」「ブランク」の状態だったかもしれない。

少し前のことだが、この時期に、母が長崎源之助先生（1924～2011年）に送った手紙を見る機会があった。神奈川近代文学館に寄贈されている長崎源之助あて書簡のなかの母から長崎先生にあてた5通のうちの1通、封書の手紙である。1973（昭和48）年2月11日付のもので、前年に刊行された、長崎先生の『やまびこ村のふしぎな少年』（実業之日本社）と『東京からきた女の子』（偕成社）を送っていた、便箋3枚のお礼状だ。細字の万年筆、ブルーブラックのインクで書かれ

ている。先生の初期の『おかあさんの顔』（三十書房 1964 年）に収録された短編や『あほうの星』（理論社 1964 年）などとはちがう「新しい世界を全くあぶなげないところまで築き上げられたそのご努力にただ頭がさがります。」と述べている。

そして、便箋 3 枚めに以下のくだりがある。（この連載では、活字になった資料を使い、書簡類は使わないと考えているのだが、この手紙だけは、長崎先生のご遺族と神奈川近代文学館に許可をいただいて引用することにした。）

童話教室を出たばかりの頃は、一冊目を出すのが大へんで、それができたら、いくらでも書けるのだろうと思っていました。その頃は、書きたいことがありすぎて、困るような気もしていました。

それが、果もなく続く坂道であることが、此の頃やっとわかってきて、あと、いくつ書けるのだろうと、やっぱり主婦の作文でしかなかったことを思い知って心細くなっております。

一作ずつご自分を越えていらっしゃったきびしいご精進に、拍手をおくらせていただきたい気持でございます。

お体大切にことしもいいものを書いてください ファンの一人としてお願い申し上げます。（以下略）

長崎源之助先生は、『びわの実学校』の同人ではない。それでも、日本児童文学者協会の活動などを通じて徐々に親しくしていただくようになったのだと思われる。（注 3）長崎先生の著書のお礼状のなかで思わずもらした心細さを、母は、どのように超えていったのだろうか。（つづく）

（注）

- 1、齊藤利彦『「誉れの子」と戦争——愛国プロパガンダと子どもたち』（中央公論新社 2019 年）も参照のこと。
- 2、宮川ひろ「まねっこ一年生」（『こどもの本』1985 年 4 月、『母からゆずられた前かけ』前掲所収）も参照のこと。
- 3、母と長崎先生との出会いは、まず、作品だったという。「「こういう世界もあるんですよ。」／今西祐行先生が見せてくださった本は、長崎源之助著『おかあさんの顔』（三十書房）でした。」（カッコ内原文）——宮川ひろ「だいすきな作品世界」（偕成社版『長崎源之助全集』月報 14、1987 年 6 月）の書き出しである。長崎先生の署名のある本だった。

拝借してきて、帰りの電車の中でもう読みはじめていました。いくつかの短編がどんな順序で並んでいたのか、おぼえてはいないのですが、「チャコベエ」

と「風琴」がもっとも印象強く、私のからだの中に絵になって残っています。

(中略)

町の子が描かれているのに、わたしが育った山の子とも、すっぽり重なりました。かあちゃんを助けて働くけなげな女の子は、わたし自身でもありました。

なお、母が長崎先生らといっしょに編集委員をつとめた日本児童文学者協会の出版物に、『わたしが子どもだったころ』全8巻(偕成社1973~74年)などのアンソロジーがある。